

教職支援室との協働による教職キャリア形成の検討(3)

青木利博 [鹿児島大学教育学部教職支援室]

迫田孝志 [鹿児島大学教育学系(教職大学院)]

森藤悦子 [鹿児島大学教育学部(教育心理学)]

Collaborating with the Teaching Support Office to Examine Careers in the Teaching Profession (3)

AOKI Toshihiro, SAKODA Takashi and MORIFUJI Etsuko

キーワード：教職支援室、教職キャリア、自主学習会、ピア・サポート

1. はじめに

平成27年12月の中央教育審議会答申「これからの学校を担う教員の資質能力の向上について」において教員の養成・採用・研修の一体的改革が提言され、各自治体では教育委員会と大学が連携して教員育成指標の作成を行った。教員養成を担う大学の教職課程の全国的な水準の確保を目的とした「教職課程コアカリキュラム」が平成29年11月に示され、教育職員免許法施行規則の改正に伴う新教職課程が平成31年度(令和元年度)入学生から適用されるなど、近年の教育改革は速度を増して実施されている。こうした中、鹿児島大学教育学部においても教育改革の動きに対応しつつ、長年の課題となっている教員就職率の向上を目指して入試制度の改善、教育実習の見直し、就職支援活動の充実など様々な取り組みを実施している。

教職支援室においても特任専門員一人ではあるが、本学部の現状を理解し、就職支援の窓口である学生係や就職委員会、有志教員と連携して学生の教職キャリア形成のために全力で取り組み、その成果及び課題を過去5回報告してきたことで、教職支援室の活動を多くの教育学部教員が理解するようになってきた。新型コロナウイルス感染拡大防止のために、令和2年度から対面による支援活動がほとんどできない状態が続いているが、この状況下において、教職支援室の令和2年度の延べ利用者数は過去最高を記録した。この傾向は、令和3年度4月～8月においても継続し、令和2年度の同時期を凌ぐ利用者数となっている。

本稿では、延べ利用者数を大幅に増加させた令和2年度～令和3年8月までの第一筆者による教職支援室の取り組み及び第二筆者、第三筆者等の取り組みについて考察し、学生の教職キャリアの形成及び教員就職率の向上のための方策について検討したいと考える。

2. 教職支援室の利用状況

第一筆者が教職支援室に着任した平成30年度4月～令和3年8月までの利用者数を表1に、同期間の延べ利用者数を図1に示す。

表1 教職支援室 H30.4月～R3.8月までの利用者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
H30	延べ	21	35	37	110	161	42	104	128	113	113	141	150	1155
	実数	15	15	22	34	39	17	49	42	36	41	43	49	402
R1	延べ	153	213	233	284	395	84	136	72	110	154	178	231	2243
	実数	46	58	51	65	77	30	60	39	27	29	29	40	551
R2	延べ	82	174	300	377	510	163	119	219	266	188	250	376	3024
	実数	26	24	38	57	57	31	62	30	29	22	32	47	455
R3	延べ	586	593	575	617	820								3191
	実数	63	64	60	65	75								327

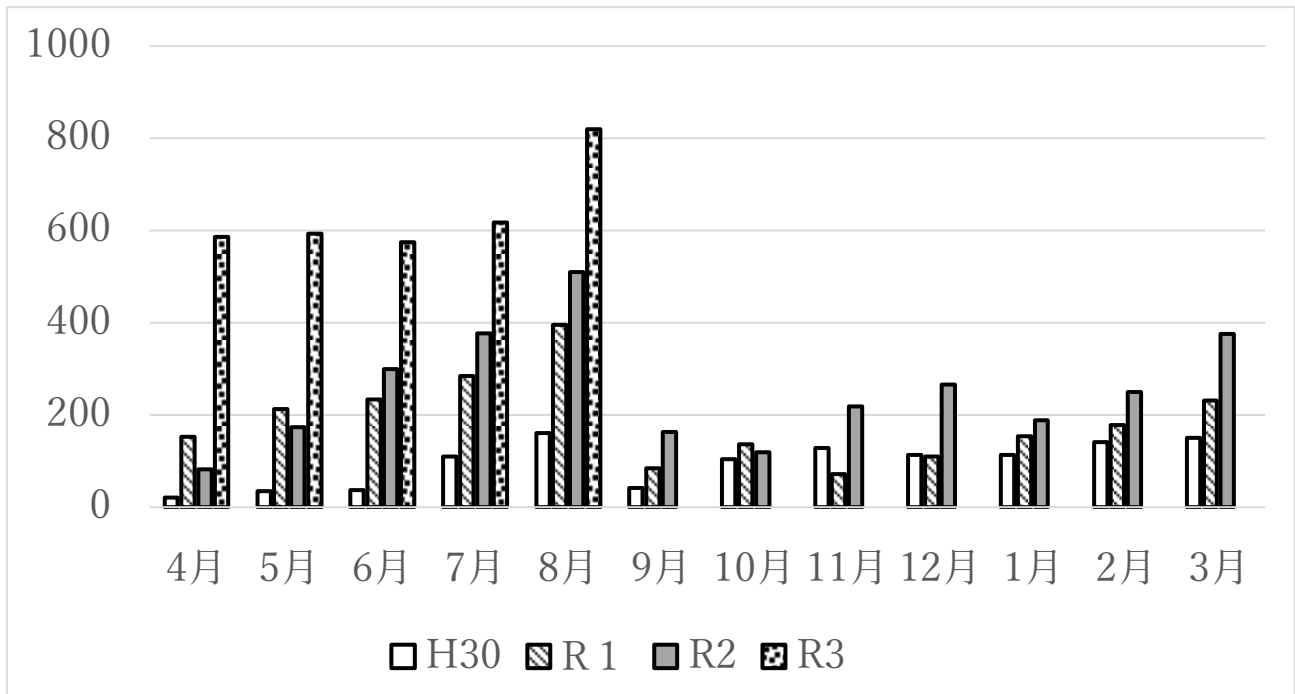


図1 教職支援室 H30.4月～R3.8月の延べ利用者数

教職支援室の利用者は、例年4月から教員採用試験二次試験が行われる8月まで徐々に増加し、教育実習が行われる9月、後期授業が開始する10月、大学祭のある11月頃まで利用者が少ない時期が続き、その後徐々に増加に転じていく傾向が見られる。また、年を追うごとに延べ利用者数が増加していることも分かる。このことは、教職支援室勤務が4年目となった第一筆者の着任以来の地道な相談活動、PR活動、学習会機能を加えた教員採用試験対策の取り組みなどが学生や教職員に理解されてきたことを裏付けるものである。

3. 令和2年度～令和3年8月の教職支援室の取り組み

3.1 令和2年度

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために教職支援室での対面での支援ができない状況もあり4月の延べ利用者数は82人であったが、実情を知った教育学部就職委員会の働きかけもあり、Zoomを活用したオンラインによる指導が可能となり個別の相談対応だけでなく、複数の学生が同時に参加し、相互の学び合いを大切にする学習会機能を導入することで、繰り返し利用する学生が増加した。8月の延べ利用者数は510人と月間延べ利用者数で過去最高を記録した。9月以降も10月以外は、前年度を上回る実績を上げ、令和2年度の年間延べ利用者数は3024人となった。

第一筆者は、令和3年3月末に4月から新4年生となる教職支援室利用学生に、これまでの教職支援室での学びをどのように捉えているのかアンケート調査を実施し、30人から回答を得た。教職支援室を知ったきっかけは、友人等からの紹介が最も多く19人(63.3%)、次いで教授・先輩等の紹介8人(26.7%)、教員採用試験の手引き2人(6.7%)、学内ポスター1人(3.3%)であった。教職支援室の利用については30人(100%)全員がよかったとの回答を寄せた。教職支援室を利用してよかったことの自由記述には様々なことが記載されたが、30人の記述全部をKHCoderを用いて共起ネットワーク図にしたものが図2である。

全部で6個のグループが確認された。図2中①や⑤から教職支援室で教員採用試験対策のための面接や集団討論の練習がたくさんできることのよさが確認できる。図2中⑥や③及び②から第一筆者の体験談から教育現場のことを知ったり、教育時事に関する質問を受けることでニュースなどへの関心が高まったりしてきたこと、他者と一緒に勉強することで新たな知識や情報を得ることができるようになったことなどが分かる。図2中④は、面接などで自分の考えをどのように表現すればよいか不安に思っていたことが練習を通して軽減されてきていることを示している。

迫田・森藤・青木(2021)において「ソーシャル・サポートの一種であるピア・サポートは、安心して学習できる環境を作ったり、学習への動機づけを高めたりする効果があることはよく知られており、教員採用試験への挑戦という不安や緊張が増加する取組においては、一緒に学習する仲間

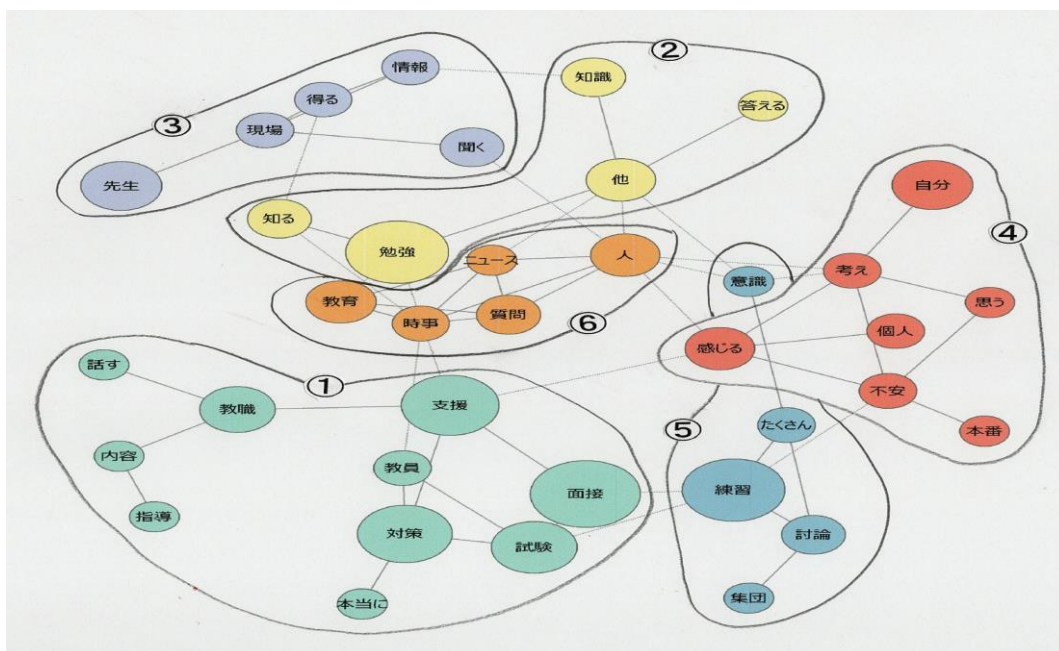


図2 3月アンケート調査自由記述の共起ネットワーク

6月は、全部で8つのグループが確認された。図3中①、③では、試験対策として面接練習や集団討論を行うことで不安が軽減され、自信がついてきたことが分かる。図3中⑤、⑦、②では、教職支援室で他者と一緒に勉強することで新しい知識や情報を得る機会となり、自分の個人としての考えや意識が刺激を受けていることが分かる。また、図3中⑥の第一筆者から教育現場の話聞くことができることや⑧の教育時事に関する話題に多く触れることができるよさが示されている。

7月の就職委員会では、教職支援室の利用者数のデータとともに6月のアンケート調査結果としてすべての自由記述の内容を印刷して配布したが、その中から特徴的なものを取り上げ、特に下線部の記述については読み上げて紹介した。「教職支援室で質問されるので、教育時事や今朝のニュースを意識的に新聞やTV等でチェックするよう習慣化された。また、多くの人と勉強するので、他の人の考えや知識を共有することができた。」「二次対策について、先生が丁寧に見てくださる上に、一緒に頑張る仲間にも支援室で出会うことができるので、モチベーションを保つことができる。利用して本当によかったと思う。」「個人面接であっても、数人同時に指導していただくため、他の人の答え方を聞くことができ勉強になる。支援室を通して、意識の高い人たちから学ぶことがたくさんあり、貴重な場だと感じている。」「どう答えればよいかわからない問いについて、先生や他のメンバーと共に考えることで、知識が深まり、面接への自信につながる。」このように、教職支援室を通じて教員採用試験と一緒に取り組む仲間ができ、互いの考えや回答に刺激を受け、高め合うピア・サポートのよさを実感しているからこそ、友人にも自信を持って教職支援室を紹介している状況があることを就職委員会で報告したことで、学生の教職キャリア形成に果たす教職支援室の役割を就職委員も改めて確認することができたのではないかと考える。

4. 第二筆者による取組

迫田・森藤・青木（前出）は、心理学専修教員志望学生への支援を中心に自主学習会の内容について詳細に報告したが、その取組は教職支援室と連携を図りながら令和3年度も継続している。図4

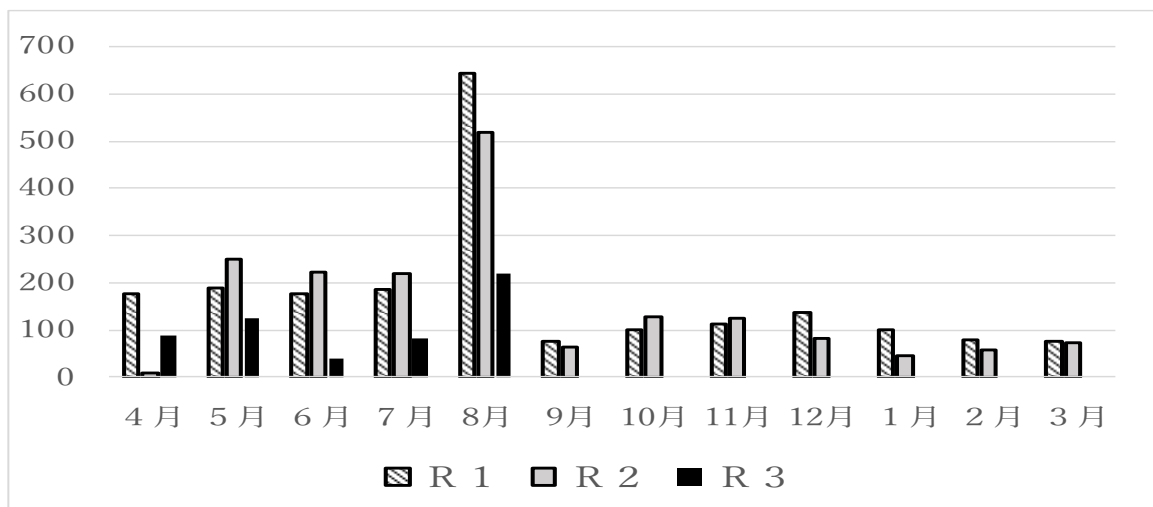


図4 第二筆者の自主学習会R1.4月～R3.8月の延べ参加者数

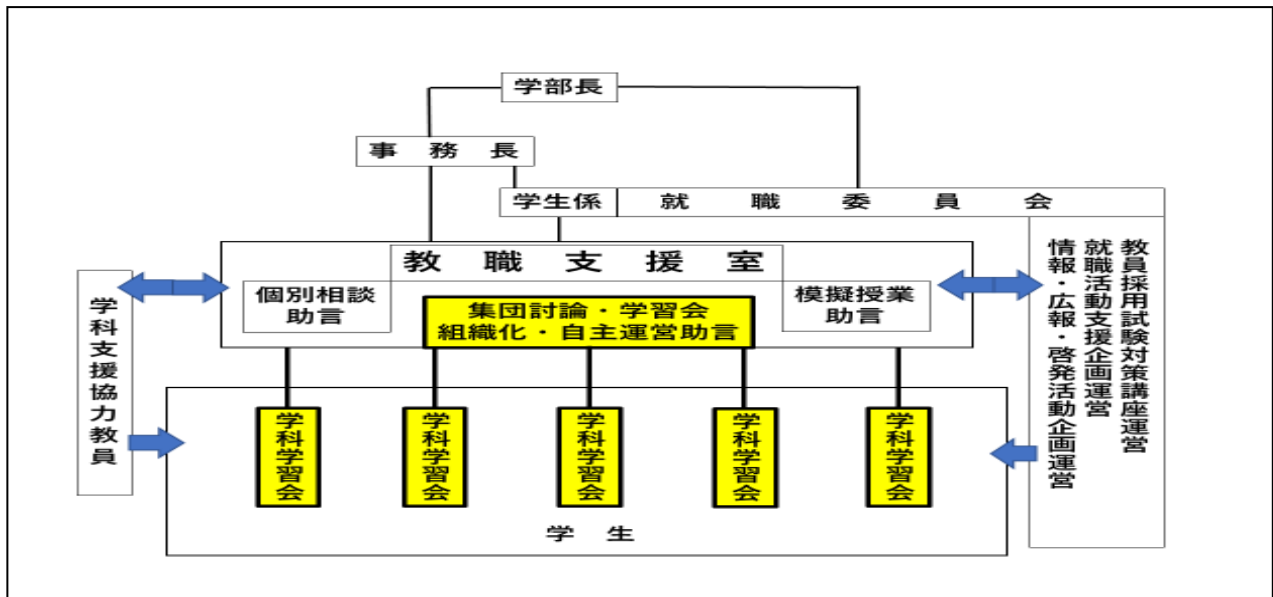


図5 学生の自主学習会を支援する体制の整備例 迫田・森藤・青木 (2021より)

○教職大学院では、必修5領域、6種類の実習、選択科目、課題研究科目の履修を通して学校現場で求められる教師としての資質を実践的に高めることができます。関心があればいつでも相談に来てください。令和3年度から改組され、特別支援教育、教科指導法も加わりました。

○教職支援室の紹介
青木利博先生が相談・助言に応じます。
事前にメールでの予約をしてください。
kyoshokusp@edu.kagoshima-u.ac.jp

○現時点で考えている卒業後の進路は？
記入している内容を確認しましょう。

図6 第二免許教育実習事前指導での教職支援室の紹介

に令和元年度～令和3年度8月までの延べ参加者数を示す。令和3年度は、教職支援室利用者が増えていることもあり、第二筆者の開催する自主学習会への参加者は減少している。この傾向は、望ましい傾向であり、迫田・森藤・青木（前出）で提案した教職支援室を核とした学生の自主学習会を支援する図5の体制が整備されることで、組織的で継続的な取組に転換していくことを期待したい。

令和3年4月に第二筆者は、第二免許教育実習を希望する学生を対象とした事前指導を行う機会を得た。その際、第二免許教育実習の目的や意義の説明に加え、第二免許教育実習を充実させるための学部授業への主体的な取組、教員採用試験等の就職対策への計画的な取組、教職支援室の延べ利用者数の紹介及び教職支援室の積極的活用、教職大学院についても図6の内容を説明し、学部4年生の時期における教職キャリア形成の重要性の再認識を促した。

参加者140名から提出されたワークシートの内容を確認し、全員に第二免許及び教員採用試験・就職試験等への積極的な取組の促し及び励ましのコメント（「友達と励まし合いながら教師としての力

を高めるために計画的に取り組んでいることが伝わって来ました。5月と言わず、明日からでも教職支援室にとりあえずアポをとってみてください。多くなると順番待ちになることもあるかもしれませんが。」「何事も事前の計画と粘り強い実践です。学校支援ボランティアへの参加、学科の仲間での学習会、教職支援室を活用した対策強化など教師として必要となる資質について自ら高める努力を継続してください。」)などを記入した。140名中25名は、教職支援室や学科での学習会等で積極的に教師として資質向上や採用試験対策に取り組んでいることが記載されており、その多くが3月までに教職支援室を利用している学生であることも分かった。6月の教職支援室のアンケート結果では、友人の紹介の割合が3月に比べて大幅に増加しているが、教授・先輩等の紹介は増えていないため、教職支援室利用を促すには、大学教員からの短時間の情報提供やワークシートへのコメント等だけでなく、学生個々への計画的で丁寧な働きかけが必要であると考えます。

また、第二筆者は令和3年8月に教育学部1年生を対象とする学校体験事前指導の機会も与えられたので、その機会を捉えて、教職キャリアの形成を図るために教育実習と教職科目・専門科目への積極的な取組の必要性、3年後には、教員採用試験を受験している現実、自主的な学習会や教職支援室の活用などについて説明を行った。その中で、第二筆者が開催する自主学習会に学部3年時から参加するとともに教職支援室も積極的に活用していた高等学校体育2年目の教師、中学校体育2年目の教師、教職大学院1年生（本学生については、本学部のPR動画として学部ホームページにアップされている）3名のメッセージを動画で紹介し、目標を持って、主体的に学部授業や教育実習に取り組むことと自主的な学習を自ら進んで行う必要性について問題意識を持たせるようにした。第二免許教育実習事前指導の時と同様に学生から提出された講義記録を確認し、192名全員にコメントを記入した。第二筆者からのコメントに対して、「探究心をもって頑張っていきたい」「なぜ教師という職を目指そうと思ったのか、どんな教師になりたいのかを忘れずにこれからの学びを通してより自分自身を高めていきたい」「小さなことの積み重ねだと思うので、日頃から主体的に行動することを意識していきたい」「これからの実習の機会で今回の学びを活かせるよう、心に留めておきたい」など数は少なかったが積極的な反応もあった。学生が教職キャリアを積極的に形成するために自己理解や教職に関する悩み・相談、大学での履修計画や主体的な学習方法などについて、入学直後から計画的に教職支援室での面談を位置づける必要があるのではないかと考える。

5. 第三筆者及び大学院生の取組

第三筆者は、これまでも第一筆者・第二筆者と連携して心理学科の教職志望の学生への相談、学習支援を個別に行ってきた。新型コロナウイルス感染拡大防止のために学生との対面による対応がほとんどできない状況であるため、個別の対応件数は減少してきているが、教職支援室の利用状況を確認しながら学生を側面から支援している。また、担当講義においてもキャリア教育の観点を踏まえ、学生の教職キャリア形成に資する情報提供や教職支援室の紹介も計画的に行っている。

令和3年度は、大学4年時に教員採用試験に合格し、教職大学院に進学した大学院生が学部の後輩の教員採用試験対策にも積極的にかかわった事例を確認できた。コロナ禍が、学生同士の結びつき

を阻害しているのではないかと感じられる中で、先輩が後輩にかかわるまさしくピア・サポートの好事例であると考える。

後輩へのサポートを行った大学院生は、「学科間の縦の繋がりや横の繋がり希薄になっている部分があるのではないかと考えている。そのため、同じ目標に向かう仲間同士でチームを組んで、お互いに高め合うことの大切さに気づいてほしい」という思いを持って取り組んだことを伝えてくれた。また、サポートを通して自分自身の学びになったこととして「進路に向き合いながら葛藤する後輩達にどのような声掛けをしたらいいのか、一人一人の性格と昨年の自分の心境を踏まえながらかかわって来たが、色々考えさせられるものがあった」とサポートを通して多くの気づきがあったことを伝えてくれた。別の大学院生は、学科の教員や教職大学院の教員にも積極的に協力を求め、面接練習を充実させる工夫をしたこと、サポートする自分自身のスケジュールを重視して無理のない計画で二次試験対策を実施したことなどを伝えてくれた。

今回確認できた大学院生と学部生による自主的な学習の場が、大学院生の存在に関係なく組織できるように教職支援室がコーディネートし、それを教員側が温かくサポートしていくことで、学生や教職員の入れ替わりがあっても長続きする体制が構築できるのではないかと考える。

6. おわりに

小学校を中心として教員採用試験倍率の低下が教員の質低下につながると懸念されているが、今こそ教員養成学部の力の見せ時である。教員採用試験に合格しやすくなったからこそ、受験対策のためのテクニックを身に付けるための学習ではなく、教師として求められる教養、専門的な知識や技能をしっかりと身に付ける学習を学生自身が主体的に行える絶好の機会である。そうした学生が自らの教職キャリアを形成していく取組を支援する教職支援室を目指して、教育学部及び教職大学院の多くの教員と連携を図りながら実践と分析を重ねていく必要がある。教育学部に入学直後に高かった教職希望学生の割合が、学年が進むにつれて低下し、卒業時には約半数が教職以外の道を選択している現状を考えると、大学入学直後から教職キャリア形成のための学習支援や個別面談を教職支援室との協働によって推進していく必要があるのではないかと考える。

また、教育学部以外の学部で中学校や高等学校の教師を志望する学生も教職支援室を利用し、教師を目指す仲間として教育学部の学生と互いに学び合う姿も少数であるが確認できていることから、全学的な視野で教師を志望する学生の教職キャリア形成に役立つ相談場所や自主的な学びの場を提供できる教職支援室のあり方も検討したい。

参考文献

- 迫田孝志・森藤悦子・青木利博 2020 教職支援室との協働による教職キャリア形成の検討
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第29巻 P218-P227
- 迫田孝志・森藤悦子・青木利博 2021 教職支援室との協働による教職キャリア形成の検討(2)
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第30巻 P163-P172